III

都市プランナーから見た横浜市企画調整室の活動

平成 22 年 1 月 27 日

講師
加川浩

鈴木：本日のゲストはプランナーの加川浩さんです。加川さんは、学生時代に田村さんと出会われ、環境開発センターに田村さんが入られた当時から一緒にお仕事をされ、田村さんが横浜市へ入庁後も、横浜関係の仕事を担当されています。田村さんを追悼する意味もこめて当時の横浜、田村明、浅田孝らの群像をお話いただきたく、よろしくお願いします

加川：加川です。よろしくお願いします。今日は学生や市役所の方等がお集まりですので、横浜市の概要はご存じと思います。

さて、横浜市の企画調整室は田村明さんが初代室長を務め、今日の横浜の都市づくりの源流となりました。その田村さんが当初お勤めであった環境開発センターは浅田孝さんが1961年に設立しました。私は事務所を見学に行き、浅田さんから「お前少し手伝え」と言われたのが、大学3年生の頃のことです。その後、「お前、俺のところに来い（就職をしなさい）」と言われて、以来10年ほど「環境開発センター」におりました。ある日「大阪から田村というのが引っ越してくるから、お前手伝え」と言われ、千駄ヶ谷のエレベーターもない4階建のマンションへ、田村さんの書籍や生活雑貨類を、アルバイトを手伝ったのが田村さんとの出会いです。

田村さんが来られてから環境開発センターは少しは会社の体をなしましたが、スタッフはたった3名でした。浅田さんが総括をし、その他は「平面、断面、立面を描く奴がいればいい。だから、スタッフは3人でいい」という持論でした。田村さんは少し役割が異なり、地域開発、地域計画を専門とされていました。

今日は、プランナーとしての浅田孝、田村明、その関係等を私なりに思い出したことを中心にお話してみたいと思っています。

戦争と浅田孝

加川：私の場合、環境開発センターでの印象は、長く浅田さんと顔を合わせていたので、浅田さんの方が強いです。今日は浅田さんの下での田村さんについてお話したいと思います。

浅田さんは田村さんの5歳年上です。年代的には同じといえるかと思いますが、当時の五年は大きな差があり、その差は戦争の体験が大きいと思います。浅田さんは東大を戦時繰り上げで卒業し、海軍に入り、技官として呉や広島の山奥で空港、港湾の設営隊長をやっていました。当時、20歳そこそこです。広島の原爆を遠くで見たそうです。そして「これはどうしたことか」と広島市まで入って行き、惨憺たる状況を見たそうで、「俺は一度そこで死んだ」とよく言っていました。悲惨な状況をつぶさに見て、設営隊長としてできることを率先したとも言っていました。

戦後、「これでは日本の復興がおぼつかない」という懸念を抱いて、終戦の翌年に東大の大学院特別研究生となりました。当時の東大の都市計画は岸田日出刀教授、建築は丹下健三助教授が担当していました。浅田さんは日本の都市の復興を果たすという使命感を持ち、勉強を再開したわけです。当時、特別研究生はフルブライト等の奨学金を得てアメリカへ行く方が多かったのですが、浅田さんは丹下研究室の主任研究員として残りました。

丹下研究室では当時、広島のピースセンターのコンペを応募しました。実は、この設計の大半は浅田さんの案だったそうで自分の戦争体験をもとにして設計されたそうです。その案は、原爆ドームを残し、原爆ドームに向かった軸線をつくる、また一部のデザインをイサム・ノグチさんが担うという計画でピースセンターコンペをまとめ上げたのです。ちなみに香川県庁舎の設計では、現場監督を担い、日本家屋的なコンクリート打ちっぱなしの作品でした。

その他の活動をみますと、浅田さんは、雑誌「新建築」で当時の編集長である川添登さんの編集顧問として戦後の特集を組んだり、最小限住宅のプランを集めたり等の活動もされました。その他、建築学会に頼まれた南極の昭和基地の居住棟等がありました。この設計は当時、日本の越冬隊が初めて南極へ行く事業があり、素人の隊員や学者ら数人がハンマー一つで一年中のブリザードの中で耐えられるプレハブ構造の居住棟をつくるというものでした。浅田さんは、

細かいディテールを含めて、全ての設計をされました。昭和基地では、その後も暫く浅田さん設計の住居棟が使われていたということを言っていました。

出遅れた日本

1950年代、アメリカの諸都市では人種問題、公害問題によって、都心部が疲弊していました。対して、CIAM（シアム）では、都市やモダニズム建築について多くの提案がなされました。当時の浅田さんは東光堂や丸善等からアメリカの都市計画に関する書物を取り寄せて勉強されており、世界の風潮の中で日本が何もせずにいることを懸念していました。

例えば、フィアデルフィアではエドモンド・ベーコン（Edmund Norwood Bacon）氏が大学で教鞭をとりつつ、フィアデルフィア市のエグゼクティブ・ディレクターを務め、30年間に渡ってフィアデルフィアの計画に携わり、フィアデルフィアの構想、都心部の再生計画等について『Design of Cities』という本も出版される等、都市計画について新たな考察をまとめていました。

また、60年代に入るとケヴィン・リンチ（Kevin Lynch）がランドマーク等の都市の記号化を定めた分析を行い、かつボストンの高速道路が地域を分断させている問題を取り上げた「都市のイメージ」という本をまとめています。

世界デザイン会議

またアメリカでは、当時ニューヨークやサンフランシスコで「プロセス」、「コーディネーター」機能的なものを重要視する都市計画がなされていました。浅田さんはアメリカのデザイナーの刺激を受け、日本なりの方法を考えるべく世界デザイン会議を開催するのです。

アメリカを中心に国内外からルイス・カーン（Louis Isadore Kahn）等、当時の建築家、工業デザイン、グラフィックデザイン関係等のデザイナーを集めて、「サンケイホール」で一週間「世界デザイン会議」を開催しました。会長は坂倉準三で、浅田さんは事務局長でした。浅田さんはゲストの招聘、設営、テーマ、セッション等、会議を取り仕切っていました。しかし、「日本から何も提案するものがないではないか」と懸念し、川添さんらへ声をかけて、槙文彦さん、菊竹清訓さん、黒川紀章さん、大高正人さん、榮久庵憲司さん、粟津潔さんらの建築家や工業デザインナー、グラフィックのデザイナーによるグループ「METABOLISM（メタボリズム）」を結成させました。彼らが日本の新しい建築、都市のイメージ、ハードの提案として、「海上都市」等を提案しました。浅田さんは、「デザインを工業製品から建築、都市まで全て総合する必要があり、この会議を『スタート』にしなければならない」ということを表現しようとしたのだと思います。

環境開発センター設立

世界デザイン会議の後、浅田さん自身も「自分でも、やらなきゃいかん」と、1961年に環境開発センターを設立したのです。民間のプロフェッショナルとして、都市計画・地域計画を担う株式会社を発足させたのです。

環境開発センターでは設立前後から「こどもの国」を手掛けていました。「こどもの国」は、当時の皇太子殿下（現天皇陛下）のご結婚を記念して、全国から寄せられたお祝い金を基金に、田奈の弾薬庫を接収から解除して、1965年（昭和40年）開園した児童施設です。当時、「こどもの国」は厚生省の管轄でした。浅田さんは厚生省と付き合いがあり、また、国立公園のキャンプ場の基準設定等をされていたこともあって、厚生省などから「こどもの国」のマスタープランの設計依頼を受けました。

その他には、浅田さんの郷里の香川県の観光開発計画（総合開発）について県から委託がありました。「一民間企業の社長が県知事と契約をし、さらに契約金は90万円にも上る」といって、浅田さんはこの案件をとても自慢していました。県の総合開発計画であり、何度も現地を視察しながら、かなり士気高くやっていたように思えます。

扇動する浅田孝、触発される田村明

加川：浅田さんが当時から考えていたのは、日本にも強力な「プランニングボードがなきゃいかん」ということで、いくつもの論文を書いています。その一例として1964年に発表された「都市開発とヒューマン・リニューアル」、1967年の「有効な都市計画の前進のために」の要約をお配りしました。40数年前、浅田さんはこのような内容を書き留めたばかりでなく、田村さんらと議論もされたそうです。私の推測ですが、田村さんは浅田さんとの議論を通して、地域プランナーとして働きたいと覚悟されたのではないかと思います。

浅田さんは「開発にプログラムを」では、実現しないようなマスタープランをいくら描いてもだめと言っていました。大事なのは「マスタープログラム」であり、なかでも地区の計画が最も重要だと言っています。

地区の計画は、都市全体の構造を左右させます。ですから、浅田さんのプログラムの発想というのは、全体から組むのではなく、地区の計画が全体にどのように影響を及ぼすかを重視していたと思います。そのために、成すべき十カ条を書いています。

一番目は、「今日の行政は、ふくれあがりすぎている。官僚的な責任分散を指向するのをやめ、これを責任集約型の機構に180度転換すべきである」。二番目は「行政府における行政機能と企業機能の混合形態を整理し、異常にふくれあがりつつある企業機能を、もっと大胆に民間に委譲すべきである」とあります。三番目は「行政本来のコントロール的な役割を明確にして、少数精鋭で責任を負うべきで、東京都政などは10名前後の民選担当参事による参事会で意志決定を行うべきである」。四番目は「自治体が中央官庁にならった局長制の官僚体制をとるのはナンセンスであり、第一線らしく参事に直属する専門サービス機関としての体制をとるべきである」と述べています。五番目では、「広域計画と地区計画とを峻別し、広域計画は都市の脈略に限定して長期不動の計画を実行し、地区の再開発計画などは民間資金を主体としてコンパクトかつ短期に完成すべきである」。六番目は「すべての計画は3年以内に公開し、現地に全貌を掲げ市民に賛否を問うなど、都市計画関連のPRや事前公開に対する努力をし、市民の側からのフィードバック組織を確立すべきである」。七番目は「公開にあたっては開発計画の具体的なイメージが示されるべきで、都市計画でなく都市設計が、数値でなく未来像が対象として議論されなければならない」。八番目は「かくして都市開発は時間空間の計画、すなわち都市設計として樹立され、開発の目標は万人の共感と理解を得ることができるし、市民の社会的な努力の標的として認識される」。九番目は「都市設計に必要な能力をもつ専門家を、計画の組織機構のなかに生かす道を開くべきである。このような専門家はごく少数の民間都市設計家を除いては見当たらないが、さらに広範な識見にたったプロデューサーのコントロールのもとに、であることは言うまでもない」。そのような能力をもつ専門家というのは、私（浅田氏）の他にはいませんという言い方なのです。十番目は「最後に、都市計画や都市開発が市民のヒューマン・リニューアルに関与することができるのは、このようなプロセスを通じてのみであることを認識する必要がある」。1から9までのプロセス、段取り、側面を展開して回すことで、初めてヒューマン・リニューアルへの道が開けるのだということを、浅田さんは田村さんへも言い、またこのような文章を発表しています。

それから、「有効な都市計画の前進のために（日本建築学会「建築雑誌」1967年より）」では「自治確立が前提〜三公の原則〜」ということを言っています。

一番目は「自治の根幹をなすものは、失敗と困難を重ねながら長い年月をかけて練られた地域住民ひとりひとりの開いた心、その自覚による公共性の認識、「公平の原則」に守られた集団の自律性に対する確信、地域社会のできことのすべてに対する参加意識にあることは明らかだ」と公平の原則を挙げています。

二番目が「都市計画の真価は特定の企業や団体の有利性のためにあるのではなくて、住民の生活活動をも加えた計画の総合性にある。この総合性が確保

されてはじめて社会正義にのっとった「公共優先の原則」が保たれる。計画の総合性が担保されるただ一つの支えは、全体の利益のために個々の不利益をガマンし合うという精神以外にない」と、公共優先の原則を述べています。

三番目は、「シビリアン・コントロールは一切の計画をその当初から公に組み立てるという「公開の原則」によって裏打ちされなければならない。これにより、市民の側の矛盾を明らかにし、これを克服して真の地域住民の支持を得て、市民の手による有効な調整の制度を確立することができる」と、公開の原則を述べています。

田村さんが環境開発センターに入るのが1963年で、今紹介した都市開発とヒューマン・リニューアルを64年に発表し、「有効な都市計画の前進のために」は67年に発表しています。68年に企画調整室が横浜市にできますが、それ以前に田村さんが一生を地域プランナーとして生きようと決断した原点がこういうところにあったのではないかと思います。

横浜と環境開発センター

東京市政調査会には鳴海正泰さんが68年までおり、浅田さんに案件を頼んでいました。鳴海さんが浅田さんを飛鳥田さんに紹介したことが、環境開発センターが横浜の都市計画の依頼を受けるきっかけになったのかもしれません。飛鳥田市長が誕生するのは63年で、田村さんが環境開発センターに入社したころですから、その頃に飛鳥田さんと浅田さんは面識を得ていたのでしょう。浅田さんは、「横浜市の将来計画に関する基礎調査」を63年に作って、その後65年に横浜市の「新しい都市づくりの構想」として発表します。続いて65年から68年まで環境開発センターでは六大事業の個別構想を提案しております。都心部再開発、港北ニュータウン、ベイブリッジの時は高速道路体型も含めていますし、高速鉄道計画・地下鉄、富岡地先の計画をやっています。

浅田さんは、横浜の都市づくりは骨格づくりが大事だったとおっしゃっていました。飛鳥田市長が誕生した当時は、まだカマボコ兵舎があって占領軍が都心部や港湾も接収していました。今でも接収地は残っていますが、当時は市内の重要な地域が接収されていました。1960年代は日本全国で戦災復興が進んでいますが、横浜は区画整理の構想が進んでも、接収されているために進みませんでした。また、60年代は高度経済成長によって東京の一極集中が高まっていましたから、横浜の郊外では人口が急増する時代です。したがって、都市計画の骨格作りが急務でした。当時は横浜市も縦割り行政でしたし、単年度予算ですから、骨格を作ることがなかなかできませんでした。浅田さんは何らかの理論武装が必要だと思い、そこで自治体として大きなターゲットを作るべきであると飛鳥田さんへ提案されました。

六大事業

当初、環境開発センターで作った構想は七つの事業だったと思いますが、それを最終的には、六大事業としました。いずれにしても六大事業を早急にやることを市長に直訴して、飛鳥田さんが受け入れたということだったと思います。

この大きなターゲットが横浜になかったら、他の都市に比べて復興・開発の遅れを取り戻せなかったと思います。逆に言うと、他の都市の戦災復興区画整備事業と比べると、横浜は個性的な都市となった一面もあったと思います。

浅田さんはデザイナーでフィジカルをも重視する方ですから、格好悪いのはダメなのです。さらに実行する上で組織的な問題へも改革を求め、市長に要請され、そして田村さんが横浜市へ行ったのです。これについて浅田さんは「送り込んだ」といいますが、田村さんは「市長に請われて」と言っています。

田村さんは東京で生まれて、「東京が原風景だ」と言っているように東京っ子ですが、横浜に住むようになって、横浜の街づくりという大きな目標を、ヒューマン・リニューアルの原則にたち、ディテールを含めて実践していきました。

田村さんを中心に進める事業

「大通り公園」は、運河を埋め、その上を公園にして、下に地下鉄を走らせるプロジェクトでした。そもそもは運河の上に高速道路が縦横に高架で走る計画でした。それを田村さんが縦横の横は少なくとも地下にするべきで、縦については無くていいのじゃないかと提案されました。当時「高速道路よ、さようなら。地下鉄よ、こんにちは」とのキャッチフレーズもあり、その地下鉄の上に公園を作ることになりました。これが「大通り公園」です。「大通り公園」の設計は骨格づくりの戦略としてもシンボリックでなければいけないということで、田村さんが発注者の立場となり、浅田さんに依頼されたのです。

プロジェクトの中で注目すべきは72年の人口急増時代に「三保市民の森」など、新しい横浜方式を用いて緑地を確保していることです。また1965年に横浜都市美対策審議会を作り、アーバンデザインの必要性を強調しています。例えば、プロムナードの事業では、調整型を含めて自ら手を下しました。緑地や「緑の環境をつくり育てる」条例、「福祉の都市環境づくり推進指針」等が、30年前の当時に条例化されたのは特筆すべきだと思います。また当時は人口急増時期で、横浜市に財源が少ない状況で田村さんらが知恵を絞って実行されたことは高く評価されるべきです。

古河電工跡地のサッカー場

六大事業の後、1970年に浅田さんは東京都の参与になりました。私は1976年までいましたが、例えば74年に「古河電工跡地構想」というのがありました。現在は住宅展示場と一部がサッカー場になっています。実は日本サッカー協会は、川淵さんや岡田監督をはじめ古河電工出身者が多く、当時の「古河電工」の会計担当者が跡地構想の担当者でした（今は日本サッカー協会会長）。当時、跡地に住宅を建てるか迷っていました。浅田さんは「バカを言うんじゃない、超高層ビルを建てろ」と1975年に提案をしたのです。住宅で土地を売却してしまうのではなく、超高層のランドマークタワーか、サッカー場にするという提案でした。当時、環境開発センターに出入りしていた高山英華さんがサッカー好きで、古河電工の担当は我が意を得たりとグラウンド案が進みました。今は練習場が少し残っていますけどね。

東洋電機戸塚工場跡地の野球場

1977年に「東洋電機戸塚工場跡地開発計画」を環境開発センターで担当しました。これは地域公団の依頼だったと思います。この跡地について、田村さんが地域公団と共に環境開発センターに来られました。田村さんはこの跡地に「プロの野球場を作りたい」と依頼されました。

野球場は収まりづらかったのですが無理して収めた画をつくって、市長へ持って行ったんですね。そうしたら飛鳥田さんは、野球が大好きだったようで、「平和公園の野球場をリニューアルしよう」ということになったのです。東洋電機跡地はその後、ショッピングセンターになってしまいました。

1978年に横浜スタジアムが竣工し、これは突貫の計画です。市民でお金を集めて、あっという間に作っちゃったのは、田村さんの力をおいて他に無いと思います。工事も大変だったようですが、結果的に市長の思惑通りにスタジアムがつくられました。

浅田孝とは

浅田さんは横浜以外にも色々なプロジェクトに関わっていますが、なかでも田村さんを「送り込んだ」ことで企画調整室が立ち上がり、今日の横浜市のまちづくりに大きな影響をもたらしたことが、浅田さんにとっても大きなことであったと思います。

東京都で浅田さんが都市改造の参与になり、これは浅田さんが目指した参与であったのですが、思うように成果を残せませんでした。浅田さんが本当に狙っていたのは、日本の都市を戦後の悲惨な状況から早く脱却させることであったと思います。そこに横浜と田村さんが上手くのったというか、ヒットしたと

思います。浅田さんは色々な提案をしますが、都市計画が市民社会の中で定着して、例えばアメリカが60年代にやっていた「プロセス」や「コーディネート」の機能は、日本の70年代では実現できなかったのです。最近はようやく形が見え始めていますが、当初はハードな都市開発のストラテジーをどう構築していくかという時代だったと思います。

はっきりと言えるのは、浅田さんも田村さんも積極的かつ創造的で、イメージ豊かな都市計画を掲げていました。浅田さんは後藤新平と対比されることが多いのですが、後藤新平は関東大震災の帝都の復興について大風呂敷をかかげて、当時の国家予算の規模で「東京改造」を掲げた人物です。それに対して浅田さんは、戦災の復興を田村さんを通じて横浜で実現をみたと思います。

浅田さんはアメリカの都市づくりの先端的なところを日本でいち早く導入した人であり、それを田村さんが見事に横浜で実践したのではないかと考えています。そういう意味では、浅田さんと田村さんが40数年前に出会ったということが、横浜の都市づくりにとって大きな源流になっていたのではないかと思います。

講義日は田村明氏のご葬儀でした

今日は特別な日だから、田村さんが若かりし頃の、浅田さんと高山英華さんの写真を持って来ました。

今にして思うと、田村さんが、環境開発センターに来る前、日本生命で担った活動も文化的であり、都市との関わりをもつ活動でした。「藤井寺球場」という日本生命の野球場をプロの本拠地にしたり、東京の日生劇場の企画を立てたりしたのは田村さんで、劇団四季の草創期であったと思います。田村さんが日生劇場を「あれは俺がまとめた」と言うくらい、日本生命の文化的な事業をやり尽くしたと言っていました。

今お配りした写真は、浅田さんの著述の中からですが、1966年ですか。高山英華さんと、浅田さんは一番右端のメガネですね、左が田村さんです。たぶん37、8歳かな。環境開発センターに入ってしばらくの頃です。それから田村さんの前に膝を組んで座っているのが、山本忠司さんという香川県の建築家です。実は丹下さんが設計した県庁舎の現場監督の県側のスタッフで、ヘルシンキオリンピックの日本の三段跳びの選手だったんです。それから、田村さんの寒中御見舞をコピーしました。まだやりたいことがあったのではないか思います。

鈴木：飛鳥田さん、浅田さん、田村さんらの出会いを田村さんに伺ったのですが、田村さんが高山英華先生に「都市プランナーとして仕事をしていこうと思う」と言ったところ、偶然その場所に浅田さんがいて、紹介されたとおっしゃっていました。最初から直接、浅田さんにコンタクトを取ったわけではないそうです。本日の講義の「都市開発とヒューマン・リニューアル」の文章を読むと、63年の飛鳥田さんの施政方針演説と似ている部分があります。となると、最初の頃から飛鳥田さんと浅田さんが繋がっている可能性があるんです。鳴海正泰先生によると、鳴海先生と浅田さんの出会いは飛鳥田さんの選挙期間中だったそで、「講演会やれ」と言われて行ってみたら、実は飛鳥田さんの選挙のための講演会の前座だったそうです。そこで初めて飛鳥田さんに会ったと言っていました。北沢先生と私ではもしかしたら、「こどもの国」のマスタープランを作る中で、委員などで関係があったのではないかと考えていますが、藪の中です。もう少し調べてみようと思います。

加川：なるほどね。「こどもの国」の委員会はありましたね。委員会というか、協議会みたいな名前だったかな。そこに飛鳥田さんもいらしたかもしれないです。

大通り公園

鈴木：もう一つ、今日の話で浅田さんが「広島の原爆ドームに向けての軸線を用いた」とご説明がありましたが、「軸線」という発想は、大通り公園においても浅田さんの考えが強く表れているのではないかと思う

のです。浅田さんは「都市軸」という言葉を用いますが、「軸」という考えが横浜の都市計画に影響しているのではないでしょうか。

加川：広島のピースセンターの計画は、原爆ドームを残すという提案が優れていたのだと思います。そのための軸線が基本になっています。大通り公園では広島のようなビスタ性を捉えた軸線ではなかったと思います。大通り公園は、あくまでも関内関外の緑の軸線構想として描いており、プロムナード構想の前段であると思います。でも関内駅のところでグググと曲がっちゃうんだけれども。

鈴木：「緑の軸線構想」は浅田さんのイメージがあったのでしょうか。震災復興の牧案は、緑の軸線構想と近いため、「緑の軸線構想」は牧案を参考にしたとも考えられるのですが、今後調べてみたいと思っています。

加川：緑の軸線構想をつくった当時は高速道路の計画が上がっており、関内周辺から高速道路を排除することが大きな目標でした。ですから「大通り公園」は高速道路の排除が目的で、「緑の軸線構想」は、それを説明するためのものでもありました。

鈴木：高速道路の地下化は、海外都市などを参考にしたのでしょうか。当時の「都市美審議会」ではボストンの例なども議論されていたと思いますがいかがでしょうか。

加川：ボストンの影響も大きかったと思います。当初の高速道路の計画は今の石川町のようなジャンクションが関内駅周辺に設置される計画でした。横方向の高速道路は機能上やむを得ないので地下化しましたが、縦方向は地下鉄も通っていますので、地下へ高速道路を入れ込むのは難しいのです。そこで、設置場所を上流へ変更させることになりました。設置場所の変更理由が「公園のため」であれば、誰も文句は言わないだろうというのが、浅田さんの発想だったと思います。

鈴木：環境開発センターは大通り公園等に関係したのですか。

加川：大通り公園の基本構想や、都心部の位置付けについての考案は環境開発センターです。その時に市で検討委員会が作られたんですよ。横山光雄さんが委員長でした。基本設計までは環境開発センターでやった覚えがあります。一番難しかったのは、公園の分断を避けるため、大通り公園を横断する道を止めたかったのです。だけど、交通上難しく、全部の実現は無理でした。また、公園に位置する地下鉄の駅をオープン・エアで明るくしたかったのですが、それも難しかったです。

大通り公園を子どもが遊べる空間へ

当初から大通り公園を「石の広場」と「みどりの森」で構成する発想は浅田さんも持っていました。田村さんは、子供が遊べる要素を盛り込んだ公園を考えていました。当時、ハルプリンという造園家が石の造形を用いる遊び場を設計しており、これを事例に大通り公園にも取り入れたいと考えていました。例えば、単なる噴水ではなくて、子どもがジャブジャブ入って遊べる水の広場等を考えたと思います。当時、ハルプリンは全盛だったんですよ。

また管理についても水の扱いを市は嫌がりましたし、木がそんなに生えるかというのも疑問視されたのです。公園の地下には地下鉄がありますしね。横浜国立大学の宮脇昭先生に相談したら、「土は30cmあれば大丈夫よ」と言われました。さらに潜在自然植生など、宮脇理論を勉強させられました。

大通り公園と周辺地域の位置関係

水と石をテーマにする部分は関内側へ配置し、大通り公園に接する教育文化センター前川國男さんに設計していただいた理由も、「都心部強化」等の空間をさらに向上させたいという背景がありました。当時の事業において、大通り公園は特別な位置づけなの

です。実施設計は浅田さんもさすがにお断りしたのですが、最終的に進来廉へ浅田さんから依頼されました。進来さんの設計はちょっと凝り過ぎたきらいもあって、それについて浅田さんは意見を言わなかったですね。

鈴木：大通り公園の一部には蚤の市のようなイベントができるようなイメージで考えていたと、聞いたことがあります。

加川：進来さんの設計では、床にアンカーを打つ事や、電源を取る等の話をしていたことは覚えています。しかし予算上、全て実現できませんでした。

鈴木：当時の公団は、この計画に対してどのように関わったのでしょうか。また、周辺の開発を取り入れるような動き横浜公園の設計の際にあったのでしょうか。

加川：公団の計画に環境開発センターが関わった記憶はありませんが、横浜公園の一部を再開発する絵は、緑の軸線構想との関係で書いた覚えがあります。

鈴木：美観地区や壁面線の位置を揃えるような計画でしょうか。

加川：大通り公園に接する建物は、それまでは運河でしたから、裏口を向いていたんです。色々工夫はしたのですが、新たに建設する建物は公園へ正面を向けるのですが、しかし点在するようでは統一されないのです。またセットバックをお願いできても、実際は上手く行かない。さらに、側道から一方通行になったため、「大通り公園」側は相変わらず裏口的な建て方をされる等、周辺整備は上手く行っていなかったと思います。

論文「都市開発とヒューマン・リニューアル」

質問：「都市開発とヒューマン・リニューアル」をみると、企画調整室の組織部分とか、実際に田村さんがやったことも半分くらい表していると思います。田村さんの文章であったら、残りの半分は浅田さんの影響と飛鳥田さんの影響を受けて、企画調整室等の田村さんの考えがもっと表れたのではないかと思うのです。田村さんは、浅田さんの影響と飛鳥田さんの影響を受けてまちづくりを形にしたのだと、本日のお話を伺って改めて思いました。その中の「ヒューマン・リニューアル」と「プログラム」についてですが、「プログラム」は、お話に出てきたアメリカの都市計画を指すと思いますが、「ヒューマン・リニューアル」もアメリカの都市計画から出てきたんでしょうか。

加川：「ヒューマン・リニューアル」という言葉が何の影響で使われたか、わからないのです。1962年に発表された「都市開発とオープンスペース」と同じようなシリーズなんです。1960年の「日本の都市美と新しい展開へ」を含めて、これらは都市問題について書いています。でも「ヒューマン・リニューアル」とう言葉の語源はわからないです。ただ、論文そのものを見てみると、アメリカの大都市問題を整理しているので、背景にアメリカの都市計画があるのではと思います。

質問：ヒューマン・リニューアルという言葉もアメリカの都市問題から発せられたのでしょうか

加川：おそらく、この論文はアメリカの都市問題等の影響があると思います。60年代始めに「子どもの国」の計画をしていますが、当時、児童福祉について勉強されていて、単なるリニューアルやデベロップメントではなく「ヒューマン」を視野に入れていたのではないでしょうか。

六大事業

質問：六大事業は、もともと別々に生じていた問題を編集して創られたそうなのですが、六つの相互関係は浅田さんらが構想される段階で、都心部強化と金沢区の関係、大通り公園と地下鉄・高速道路の関係等、六つの課題以外に相互関係や優先順位などを含めた

プログラム化等は当初からできていたのですか。それとも、田村さんらが現実化する中で構成されたのでしょうか。

加川：当初、六大事業はターゲットとして重要でしたから、個々のプログラム等の関わり具合は考えていなくて、実践していく中で田村さんが考えていきました。高速道路も仮計画のようにありましたから、具体的にルートをどうするかというのは後から考えていく方法でした。また期限の設定もほとんど無いです。浅田さんもプログラムが重要といっていたわりには、六大事業のプログラムは当初から考えていません。ただ、田村さんは都市問題調査会で高山英華さんや河合正一さんらからその都度説明を聞いて議論をしたと思います。

例えば、港北ニュータウンでは多くの議論がありました。鉄道の入れ方では、八十島義之介さんが「センター（センター南・センター北）」での指示があったようで、八十島さんから「どんな駅になるか描いてくれない?」って言われたことがあるんですよ。当時、多くの専門家が田村さんを応援され、月に一回程度集まっていたそうです。

横浜での活動後の環境開発センター

質問：浅田さんや環境開発センターは、その後どのような活動をされていたのでしょうか。

加川：1978年に「新高松空港の社会的・経済的効果検討」後、1、2年で環境開発センターの実態はなくなるのです。浅田さん自身は、「開発センターの店じまいに2～3年かかっちゃったよ」と言っていましたが、ご本人が既にトヨタ財団の専務理事になり環境開発センターは実質的に活動しなくなります。浅田さんはトヨタ財団で世界中からの研究案件を仕分けて各研究への予算等を組んでいたそうです。

また、その後は浅田さん自身で何かを提言するようなことはあまりなかったと思います。浅田さんは提言すべきことを30から40歳で全部言っているのです。実は浅田さんの甥子さんが浅田彰で、彰さんのお父さんが早く亡くなり、浅田さんが父親代わりのようだったそうです。浅田彰さんが京大の頃に浅田さんのお考えをよく話をされていたそうです。

浅田さん個人としては、沖縄の海洋博後始末のようなことは、やっていたかな。

質問：浅田さんはご自身の位置付をどのようにお考えだったのでしょうか。プランナーでしょうか?

加川：浅田さんが自身をどのように位置づけていたかは、はっきりとわからないです。田村さんは組織を上手くつかったプランナーであると思います。比べて、浅田さんは組織等へ身を置かないアウトサイダーとしての立場を貫いていたと思いますね。浅田さん自身はプランナーでもプロデューサーでもなければ、デザイナーでもありませんでした。そういうことにはだわらない人でしたから。

プランナーという職

質問：70年代では「都市プランナー」等が初期の民間コンサルタントがみられ始めた頃ですが、浅田さんと初期の民間コンサル等の関係はあるのでしょうか。

加川：「民間コンサル」との関係はなく、むしろ「コンサルタント」という言い方をとても嫌っていました。ですから、浅田さんが求めていた都市計画から「コンサルタント」という専門が出てくるとは思わなかったそうです。浅田さんが思っていたプランナーと、新しく出てきたプランナーとは、ちょっと違うのだと思います。

鈴木：浅田さんと後に出てこられたプランナーとは世代が異なることもありますが、次の世代のプランナーは、高山英華の考える都市計画が基礎として身についていた人たちですよね。しかし浅田さんは高山英華の考えを否定するような思考があると思うのです。浅田さんや田村さんは定量的な都市計画等に

対して疑問に思っていたと思いますが、浅田さん自身はどのように考えていたのでしょうか。むしろ部分的な考えよりも、全体を捉えるマスタープランを重視されていたのでしょうか。

加川：マスタープランは重視していなかったと思います。高山さんについてどう思っていたかはわかりませんが、浅田さんは学者ではないのでもっとダイナミックでした。浅田さん自身は、実際にことが動いているのをそばで見ているのが好きなのです。だから、デザイン会議についても動かすまでの準備段階を重視しているし、それが楽しいみたいでしたね。一旦レールができたり、作られたりすると、全然面白くないというか。だから、「プランナー」とういう職種も、若いプランナーが出てきたりすると、既に興味がなくなっているのです。彼らとは違うのであれば、異なる点を主張すればいいのですが、そういうこともしませんでした。同じようなことをやられると、興味がなくなるというか、目標ではなくなるのです。69歳の若さで亡くなったことも、凝縮した人生を表しているように思います。田村さんも同じようなところがあると思います。横浜のまちづくりを広めたこの時代、企画調整室も一番輝いて充実していたのではないでしょうか。

浅田孝からの教え

質問：浅田さんや田村さんのご活動、加川さんがプランナーとなったその経緯や、彼らへの思いなどを、加川さんはどのように考えていらっしゃいますか。

加川：僕は、プランナーというより職人であると思っています。僕は環境開発センターに長く勤め、僕が辞めるとき浅田さんに「自分でやってみたいと思います」と言いましたら、「三つ守れよ」と。いまだに僕はそれを守っています。一つは「所員を雇うな」って言うんですよ。これは強烈でした。環境開発センターには多いときでも6、7人程度で、ベースは3人で十分であるという考え方なのです。「所員は雇うな。お前、奥さんいるなら、奥さんに電話番とかやってもらえばいいんだから」と。

それから、「事務所を持つな。お前は寝るところがあるんだろう。そこでやれ」と。浅田さんは、環境開発センターの終盤は白金にあった自分のマンションを事務所としました。それまでは、銀座とか虎ノ門の賃料が高いビルの一角を借りて、やっていたわけですよ。でも、そういうことをするなと。

三つ目は、「思ったことをしっかりやれ。失敗をしても、日本人は必ずフォローをしてくれるし、修繕をしてくれるから、お前が失敗しても大丈夫だから、思い切って信じることをやれ」と。

その三つを言われて、最後の「思い切り」は通せませんが、はじめの二つは今でも通しています。また浅田さんは「フリーハンドでやれ」ということもおっしゃいました。崇高な目標はあっていいのですが、細かいことが前提になっちゃうのは、この世界ではよくないということを言われました。

浅田さんは、環境開発センターを企業として見ようという精神はほとんどなく、逆に所員一人ひとりを大事にしてくれました。田村さんが来て会社の体を少しなして来ましたが、それまでは道場のように、僕のようなアルバイトやアルバイトまがいの人もいるし、そういう人たちがワサワサと夜昼なく活動していました。「たまには日曜日くらい帰ろうよ」というのが、スタッフの口癖でしたから。懐かしい時代ですが、そういうのが許されていたのだと思います。

浅田さんは、色々なことを身をもって示していました。仕事の際リポートを持って県庁へいくのですが、浅田さんは大事な報告会によく欠席するのです。知事を相手に交渉することは30歳前の僕にとって訓練のようでした。浅田孝の代理だといっても、「会社の責任者であると思ってくれ。社長に相談してきます」とは絶対に言うなということを、入社早々に言われました。ですから生産性は悪いんですよ。効率は悪いし、支離滅裂なところはあるのですが、プランナーオフィスのやり方として大事なことを示していると思いました。

浅田さんはピラミッド組織が嫌いでしたが、田村さんが来たときは、計画部長という肩書きをつけました。でも計画部長だけはいたのです。当時、設計みたいな

のをやっていた人と、調査みたいなのをやっていた人たちとが入り乱れていました。みんなが両方できていたんですよ。専門分化させないということだったと思います。

今では、会社の組織や教育が細分化されているようで、「大雑把にまとめて」ということが無いような印象です。だから、会社でも誰に話せばいいのかということがわからない。トップに話せばいいかというと、そうでもないのですよね。センターでは、全員がトップですから。浅田さんは「最後には俺が尻拭いをするから、お前らは怖がるな」ということを、盛んに言っていました。ですから、大きな傘の中にはいっていたという感じはありました。

浅田孝と田村明の図面（絵）

鈴木：そのような中で田村さんは、どのような立ち位置で仕事をなさっていたのですか。立ち位置というか、田村さんは画を描くタイプですか。

加川：基本的には、描かなかったですね。語るタイプ、文章を書くタイプでしたね。

大通り公園の会議中に落書きをしていましたね、木の絵を。掃除の問題や落ち葉で滑る等の問題で、緑政局から「落葉樹は困る」「ぜひとも常緑にしてくれ」という要望を受けました。それに対して、浅田さんは「落葉がいい」と言い、田村さんも落葉派でした。田村さんは、葉っぱがたわわになって影ができている絵や、冬の枯れたケヤキの絵を会議中に描き、「こっちがいいよなあ」と。わかりやすい絵でした。

浅田さんは、トレペの上でとてもきれいに描くのです。でも田村さんは、そういう繊細な画じゃなくて、マジックを重ねて、重ねているうちにずれてくるでしょう。一方、浅田さんはトンボ（目印）を入れますので、絶対にずれませんし、パーカーの万年筆で描きますので繊細な画でした。浅田さんは建築家ですから、目検討のような観測が入らないんですよ。でも田村さんは、描いているうちに「新横浜」がずれてきました。（笑）

だけど、概念としては「あそこが太陽だ」というように目標がしっかりしているから、ずれてきても全然おかしくないんですけどね。

だから、田村さんの描く絵というのは、自分のイメージ・構想を表すもので、「絵」というか、概念なんでしょうね。大きな製図板みたいなところで、マジックを用意して、ワアワアと描くことが、環境開発センターの頃も好きでしたね。浅田さんは時々入っては、やはり「パーカー」で描くのです。それは田村さんの概念をデザインしているかのようした。また、浅田さんのスケッチを田村さんがシェーマ化することもありました。

市役所でも田村さんはプロジェクトやアーバンデザインに関して、「大テーブル」でトレペの上でやるのが好きだったんじゃないかと思います。40年前のものですが、あの製図版もまだ残っています。あの製図版は田村さんが特注で作らせ、またファイルを色つきのものにしたと、そんなことを自慢気に話されていたことがありましたね。

浅田孝のデザイン思考

質問：参考にするようなデザイナー、街や都市等、浅田孝さんが形態的に、図柄として頻繁に見ていた、というものはあったのでしょうか。

加川：ちょっとわからないなあ。嫌いなのはあったようで、「これはダメだ」というのは、たくさん聞かされました。

質問：先ほどハルプリンの名前が出ましたが、ハルプリンのおもしろいところは、ランドスケープデザインとして都市空間の人間の動きを上手に取り入れる方法を用いていますが、同様に人間の動きを意識して都市デザインをされたのでしょうか。

加川：それはあったと思いますね。イサム・ノグチさんを好んでいました。イサム・ノグチさんは、香川県でイサム・ノグチ庭園美術館を作っており、また古い民家を移築して住まいにするような素朴といいます

か、そのようなセンスを気に入っていたようですね。

また浅田さんは、四国の出身で香川県にかなり愛着を持っていましたから、一番尊敬していた人は、たぶん空海だと思います。浅田さん自身も言ったことがあるのですが「弘法大師」だって。「彼は、若くしてすごかったんだよ」と言うけど、その世界はわからなくて。でも、影響を受けていたところはあるかもしれませんよ。香川県や四国の調査で遍路以上に歩いていると思います。

浅田孝のネットワーク

鈴木：世界デザイン会議等で建築家を世界中から招聘してくる際に、自分の価値観に合わせたプロデュースやコーディネートはあったのでしょうか

加川：それはわかりませんが、丹下研究室にいた頃のネットワークを使ったかもしれませんね。

鈴木：横浜の各地の計画では、みなとみらいは大高さん、金沢区は槇文彦さんなど、これらは田村さんの人脈、あるいは浅田さんのつながりだったのでしょうか

加川：どちらかはわからないけれど、僕の印象では田村さんではないかと思います。浅田さんは香川県で、丹下さんとか大江さんらの建築家を招聘しては、その設計で体育館を作ったりしていたんです。そういう建築家の使い方を浅田さんは知事と一緒にやっていて、それを田村さんはみていたと思います。

鈴木：そのような建築家の方々とつながったのは、環境開発センターだったのでしょうか？

加川：そうだと思います。

鈴木：田村さんも建築を出られていますが、学生時代のつながりはいかがでしょうか

加川：丹下研究室に出入りしていた時よりも、環境開発センター時代では「メタボリズム」の連中が毎週のように来ていましたから、そこでつながりができたのかもしれません。

地下鉄のデザインは、委員会やンボルマークを作ったりしたのは、田村さんです。たしか、榮久庵憲司さんにお願いしたり、田村さんが中心に動いていました。

鈴木：田村さんとご一緒に地下鉄に乗っている時の話なのですが、当時、交通局が窓面に広告を入れていたのです。しかし、地下鉄の駅舎のデザインは列車が駅に入ると、座席に座った位置から黄色い帯がスーッと見えてくるデザインだったのですが、それを「広告が邪魔をするなんて」と言っていた記憶があります。

加川：車両までトータルにデザインする事例は日本にはまだなかったのです。当時、浅田さんがサンフランシスコの地下鉄の写真を送ってきてもらって、田村さんに見せて「これはやらなきゃね」という話をしていたのは、記憶にあります。

ただ、車両が動く際の駅舎のデザインの詳しい背景までは知りませんでした。高速道路標識のデザインは環境開発センターで手掛けていました。泉さんや粟津さんや田村さんも興味を持っていたと思います。

鈴木：田村さんのヒアリングでは、大通り公園、地下鉄、高速道路地下化は自分がやったと強く思っているようで、ご自身もこれらのプロジェクトの実績を大事にしているようです。ですから、地下鉄の先ほどのようなお話や、大通り公園のメンテナンスが悪い等と時々おっしゃっており、大通り公園や地下鉄を再生しなければならないと思っています。

加川：大通り公園の進来さんがデザインされた「山」（ランドスケープ）の部分がなくなっちゃいましたけどね。使いこなせなかったのかな。当時「便所が」という要望があったのですが、公園にむき出で設置されるのも困ると考えていたようです。

鈴木：お配りいただいた田村さんの寒中見舞いを改めてみたのですが、まだまだやりたいことがあったのかなと思います。特に最後のパラグラフで、都市論と22世紀論を書きたいという、そういう意欲をお持ちになっていたようで、22世紀はアフリカの時代だという口癖のようにおっしゃっていました。

加川：そう、22世紀はブラックパワーですと書きたかったみたいね。

鈴木：まだまだご活躍いただきたかったと思うと色々な思いが巡ってしまいます。

今日は加川さんのお話でまわりつつ、田村明さんを偲ぶ会にもなりました。非常に貴重なお話を聞かせていただきまして、どうもありがとうございました。

加川：どうもありがとうございました。